

研究論文

カズオ・イシグロの『日の名残り』
における一考察

小西 弘 信

A Study of Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*

Hironobu Konishi

I

カズオ・イシグロ (1954-) の『日の名残り』(*The Remains of the Day*) は、1989年に出版された。この作品は、彼の3作目であり、出版された年にブッカー賞を受賞した作品である。さらに2017年にイシグロはノーベル文学賞を受賞した。『日の名残り』は彼が書いた作品のなかでもきわめて評価が高く、多くの読者を得た作品である¹⁾。

また物語の舞台の中心が大英帝国の時代の息吹が残ったイギリスであり、歴史小説としても読むことができるだろう²⁾。そして、この物語のなかでイシグロは、第一次と第二次世界大戦から戦後へと価値観が大きく移り変わっていくイギリスの社会を、ステューブンスという執事を語り手及び主人公とし、彼の視点から描いている。原英一は、『日の名残り』について、イシグロがデフォー (Daniel Defoe) から始まるイギリス小説の伝統をかくも見事に継承していると指摘し、以下のように述べている。

第一作 [『女たちの遠い夏』] と第二作『浮き世の芸術家』では日本人を主人公とする小説を書いた彼は、第三作『日の名残り』で、生粋のイギリス人執事を語り手とした。ステューブンスは、いかにも貴族の大邸宅に勤めるベテラン執事らしい語り方で語り、思考も行動も、そのパターンは典型的なイギリスの執事のそれだ。いや、おそらく「イギリスの執事の典型」なるものが何か、我々はほんやりとしかイメージしていなかっただろう。ステューブンスの造形によってそのイメージが確たるものになったのだ。だとすれば、イシグロは執事に象徴されるイギリス的なものを、その言語、語り口によって再創造したとすらいえるのではないだろうか³⁾。

そして、谷田恵司は、イギリスの文化に注目して「この作品には、特に外国人から見て『まさにイギリス的だ』と思われる二つの要素が取り入れられている。執事という職業と、彼が旅行してゆく田舎の景色の美しさである」⁴⁾と述べている。また、イシグロが日本を舞台にした前二作とは違うイギリスを舞台にした『日の名残り』を執筆したことについて、バリー・ルイス (Barry Lewis) は “Ishiguro was eager to escape from the stereotyping of his first two books as Japanese.”⁵⁾と発言している。このようにイシグロが小説の舞台を移し替えた経緯には、イシグロの作家としての立ち位置について、平井法が指摘する「イギリス人の血筋を引く、いわゆる正統なイングリッシュ作家とは異なる、日本人でありながらイギリス国籍をもつブリティッシュ作家イシグロの複雑さ」⁶⁾が要因としてあるのだろう。

さて、『日の名残り』であるが、作品の社会的背景としては、イギリスは立憲君主国あり、現在でもエリザベス女王や王室を頂点として、階級制度が存在していることが挙げなくてはならない。この制度の存在はイギリス国民の誰もが意識しており、異なる階級同士の関わりはほとんどないことが特徴である。

スティーブンスの務める執事の仕事も、イギリス階級制度のなかに組み込まれた伝統的な職業である。かつてイギリスには、上流階級の人々が郊外に構える広大な邸宅に、家令として執事、料理人、従僕、下男、庭師など男性の使用人の他に、ハウスキーパー、レディーズメイド、乳母、メイドなど、女性の使用人も存在していた。そして、イギリスは、第二次世界大戦とともに階級制度が形式上は解体され、家令も消滅していった。

『日の名残り』の舞台と時代の設定は1956年のイングランドである。スティーブンスは、執事を30年以上務め、おそらく60歳を超える年齢に設定されている。現在ではアメリカ人の富豪ファラディ氏に買い取られているが、かつては英国の貴族の館であったダーリントン・ホールで、彼は若い頃から第二次世界大戦を経て現在も同じ職に就いている。彼は何よりも品格を尊重し、形式や外見を重視する性格の持ち主として描かれている。そして、彼は生涯を通して執事としての「完全主義」を追及してきたのである。

しかし、今のスティーブンスは冗談好きな現在の屋敷の主であるファラディ氏とコミュニケーションを円滑に図ることができず、満足のいく仕事を行うことができない。また、初老の彼は加齢を認めていないが、“The fact is, over the past few months, I have been responsible for a series of small errors in the carrying out of my duties.” (「じつは告白せねばなりません、私はこの数か月間に、仕事の上で小さな過ちをいくつか重ねてしまいました」) (5)⁷⁾と失敗するようになったことを告白しているのである。これら二つの彼にとって不都合なことは彼に大きな精神的不安を与えることになっているのである。

ステーブンスは、ファラディ氏から、数週間アメリカに帰国することを告げられ、彼が留守にしている間にイングランドを数日間旅する機会を与えられる。ステーブンスは、雇い主の申し出をありがたく受け入れながらも、そのような旅行をするには、職務上の立派な理由がなければならないと律儀に考え、旅行の話に乗り気ではない。そんな折、彼のもとに以前一緒に屋敷で女中頭として働いていたミス・ケントン（現在はミセス・ベン）からの手紙が届く。執事として館を切り盛りする上で、彼は使用人不足が原因で最近少々困っており、彼女に復職の可能性を打診するためという大義を得たことによって、ようやく提案された旅行の実行を決め、ファラディ氏の車を借りて旅行に出る。

以下は作品の冒頭で、ステーブンスが、これからの旅行を意気揚々と出発する想いを語っているところである。

It seems increasingly likely that I really will undertake the expedition that has been preoccupying my imagination now for some days. An expedition, I should say, which I will undertake alone, in the comfort of Mr Farraday's Ford; an expedition which, as I foresee it, will take me through much of the finest countryside of England to the West Country, and keep me away from Darlington Hall for as much as five or six days. (3)

ステーブンスの旅はこのように始まり、7日間に渡ってのミス・ケントンを訪ねる旅物語として展開される。この冒頭部によって、読者は主人公の立場がはっきりし、物語の大筋も予想できるのである。本作品は、イングランド南西部への小旅行での見聞と回想を語るという初老の男の人生談の体裁をとった一人称小説なのである。

注目すべき物語の構成としては、主人公が、最近の日々の出来事や旅の途中で見た風景の感想や出逢った人々との語り合いの順を追っての回想であり、それがプロット展開の基軸となっている。しかし、その回想の分量をはるかに超えるのがかつての屋敷での回想談であり、彼の語りの大部分を構成している。つまり、その昔の出来事があるとその延長線上で最近の出来事が起こったように、過去の回想と最近の回想とがスムーズにつながっているのである。

本研究は、イシグロの『日の名残り』を通して、旅をするステーブンスの執事としての職業観と人生観の変化を見ながら、イシグロの本作品の創作の意図を探求するものである。また、作品に描かれる旅の中の情景と主人公の心境に注目し、タイトルである「日の名残り」の意味も考えるものである。

II

ここでは、旅の中でスティーブンスが執事としての職業やこれまでの人生を振り返っていることに焦点を当て述べる。旅行中の回想のほとんどで、彼は、執事としての誇りや執事という職業について思うところを常に延々と語っている。つまり、彼は執事という職業の意義や紳士の定義まで、やたらとこだわっているのである。彼が自分の職業をこのように語ることにについて、新井英夫は「スティーブンスの旅の目的は、自分のこれまでの執事としての行動が誇りあるものであり、物語る現在においても、偉大なる執事であり続けているのだという自信を確認することにあつた」⁸⁾と言及している。

旅の最初のソールズベリー宿で、彼はその日の朝に丘の上で見たうねりながらもこまでも続く田園風景の素晴らしさを振り返る。それは典型的なイギリスの風景であり、彼は「品格」(“dignity”)を感じ、その品格は「偉大さ」(“greatness”)とまで言えると感嘆する。彼はその風景の「偉大さ」に触発され、それを執事に関連させ「偉大な執事」(“a great butler”)とは何かについて言及している。

This whole question is very akin to the question that has caused much debate in our profession over the years: what is a 'great' butler? I can recall many hours of enjoyable discussion on this topic around the fire of the servants' hall at the end of a day. You will notice I say 'what' rather than 'who' is a great butler; for there was actually no serious dispute as to the identity of the men who set the standards amongst our generation. (29)

このように回想の中で彼は執事としてのプロ意識を何度も語り、それは過剰であり、むしろくどいという印象さへ読者には与える。しかし、立派な執事あることこそが、当時の彼にとってのすべてであるのだ。これがイシグロのとった本作品の主人公の描き方である。

そして、このように執事に徹しようとするゆえに、スティーブンスは自分の感情を言葉の上にはあまり出さない。そこには静けさすらある。それは、彼が感動しているイギリスののどかな田園風景にも通じるのである。

I would say that it is the very *lack* of obvious drama or spectacle that sets the beauty of our land apart. What is pertinent is the calmness of that beauty, its sense of restraint. It is as though the land knows of its own beauty, of its own greatness, and feels no need to shout it. (28-29)

しかし、その静けさを彼が日常の生活で保とうと努めることは、彼の心理を複雑にしているのである。物語で、彼の父親老スティーブンスが、屋敷に副執事として勤めることになり、親子二代にわたって一人の主人に仕えることになる。ある日老スティーブンスは客人に茶菓子を運ぶ役務中、庭の板石に躓いて転倒し、盆に載せていた茶菓子とともに石段近くの芝生にばら撒くという大失態を犯してしまう。執事としてのプロ意識から、スティーブンスは父親に今後屋敷で行われる重要な催事の時には、それに係るような役務から外さざるを得ないことを告げる。その際の二人の会話に関して、肖軼群はスティーブンスが父親に対しての呼称を変化させていることを以下のように注目している。

老スティーブンスが客人の前で転倒し、失態を晒した出来事から生まれたこの発話の中に、代名詞の変化が見られる。スティーブンスは最初は 'you' を使ったが、仕事の話に入った途端に 'he' に切り替えている。目の前にいる父と直接会話しているところで三人称代名詞を使うことにより、スティーブンスはこの発話で父との距離を引き離しているのである⁹⁾。

そのプロ意識は、彼の父親の臨終の場面でさえ現れるのである。スティーブンスは、屋敷で行われる国際会議に係る宴会の最中に、ミス・ケントンから父の死を伝えられる。彼は職務のために父のもとに行かれないことを彼女に伝え、付け加える言い方で、*"Miss Kenton, please don't think me unduly improper in not ascending to see my father in his deceased condition just at this moment. You see, I know my father would have wished me to carry on just now."* (「ミス・ケントン。私を薄情だとは思わないでください。この瞬間にも上に行って、父の死顔を見たいのはやまやまですが、それはできません。父も、いまは私に任務を果たしてもらいたいと望んでいるはずです」¹⁰⁾) (106) と彼女に父親のことを委ねるのである。この言葉が執事から一人の息子として素になった精一杯の言葉なのである。スティーブンスがこのような言い訳をするのは、執事として父親を尊敬し、目標の対象としてきたからでもある。

そもそもスティーブンスが、旅行に出かけることを決意できたのは、ミス・ケントンからの手紙だった。彼女の手紙から、彼女は結婚することで屋敷の仕事を離れたが、その後夫とうまくいってないことや、離婚もほのめかされていると彼は読むのである。手紙で彼女のことをこのように触れることについて、彼は *"But let me make it immediately clear what I mean by this; what I mean to say is that Miss Kenton's letter set off a certain chain of ideas to do with professional matters here at Darlington Hall"* (「ただ、誤解なきように願いたいのは、私はミス・ケントンの手

紙で職業意識を刺激された、ということなのです」(5)と読者に一応伝えるのである。ここでも彼は自分の素の気持ちを言葉では明かさないのである。読者には彼の心理の読み解きは容易にさせない。しかしミス・ケントンの手紙が彼を刺激したのは確かと言えよう。すなわち、彼が旅行に出かける動機は、実は仕事とは関係がない、彼女との個人的な理由によるものだと読者は行間から読み取ることができるのである。

スティーブンスとミス・ケントンとの間柄は、恋愛的要素を含んで物語を構成する軸の一つになっている。二人が互いを意識しあっているシーンは多々ある。彼らはたびたび衝突をするのであるが、互いに惹かれあってもいるように、彼らの関係は微妙な描かれ方をしているのである。

たとえば、ミス・ケントンが屋敷に来て間もない頃、彼女が突然スティーブンスの部屋に花瓶をかかえて入って来ることがあった。それは、彼の部屋がプライベートな自室でも余計なものがないというのは、あまりにも寂しいと思ったゆえの彼女の好意だった。以下が、二人のやり取りである。

'Mr Stevens, I thought these would brighten your parlour a little.'

'I beg your pardon, Miss Kenton?'

'It seemed such a pity your room should be so dark and cold, Mr Stevens, when it's such bright sunshine outside. I thought these would enliven things a little.'

(52)

この後、スティーブンスは "Miss Kenton, I appreciate your kindness. But this is not a room of entertainment. I am happy to have distractions kept to a minimum." (「ご親切はありがたいが、ここは娯楽室ではないのですよ、ミス・ケントン。気を散らすようなものは、できるだけ少ないほうがよろしい」) (52) と述べ、彼女の好意を拒絶するのである。このように二人が屋敷にいる間は一貫して彼女が積極的に彼に関わろうとし、彼が彼女を避けるという微妙な関係となっている。そういう関係にならなかった時は、二人が翌日の仕事の打ち合わせのためにもった終日のココアを飲みながらの翌日の打ち合わせの時だけであった。しかし、この時間も、スティーブンスは彼女がうわの空で自分に應對することで気分を害し、その打ち合わせも止めてしまうのである。

人に接する際の二人の違いはこうである。ミス・ケントンは孤独であることを恐れ、スティーブンスは人に関わることを嫌悪する。彼女が彼に関心を示し、その感情を隠さずに出す。一方、彼は彼女の恋愛感情をうすうす気づいているのだが、応えることができない。執事と女中との恋愛はご法度であり、それを犯した際には、

彼は執事を辞めることになり、自分が自分でなくなることに恐怖しているのである。

結果的にステューブンスは仕事と恋愛を掛け合わせることができず、これら二つの案件のあいだで引き裂かれてしまい、結局は十分に考え抜くことができないまま、彼女との結婚をする機会を不器用に失ってしまうのである。旅の終わりで再会した彼女は美しく老いていた。しかも彼女から、あのまま屋敷でもし彼と一緒にしていたら、別の人生だったかも、と伝えられるのである。彼女からそう言われた彼は回想の中で以下のように心の動揺を告白している。

I do not think I responded immediately, for it took me a moment or two to fully digest these words of Miss Kenton. Moreover, as you might appreciate, their implications were such as to provoke a certain degree of sorrow within me. Indeed—why should I not admit it?—at that moment, my heart was breaking. (239)

このように旅の終盤で彼は取り戻せない過去を後悔しているのである。そこには執事ではなく、素の人間としてのステューブンスに彼はなっているのである。

現在のダーリントン・ホールの主人になっているのは、ファラディ氏というアメリカ人の富豪である。かつての主人は、ダーリントン・ホールの名にあるように、今は亡きダーリントン卿だった。

物語の中で、第一次世界大戦後ダーリントン卿は、ドイツの親派とみなされ、ナチスドイツの融和派であり、彼の屋敷では英国首相とドイツ大使の密談が行われるなどしていた。そのことで、卿は第2次大戦後にイギリス国民から強烈な批判を受けることになる。その後の卿の行く末は不幸なものとなる。しかし、ステューブンスにとって、卿に仕えている時がもっとも精神的に強く生きることができた時だった。以前ミス・ケントンから “It occurs to me you must be a well-contented man, Mr Stevens. Here you are, after all at the top of your profession…” (「いま、ふと思ったのですが、あなたはご自分に満足しきっておられるのでしょうかね、ミスター・ステューブンス。だって、執事の頂点を極めておられる…」) (173) と言われたときに、以下のように彼はきっぱりと言い返すのである。

‘As far as I am concerned, Miss Kenton, my vocation will not be fulfilled until I have done all I can to see his lordship through the great tasks he has set himself. The day his lordship’s work is complete, the day *he* is able to rest on his laurels, content in the knowledge that he has done all anyone could ever reasonably ask of him, only on that day, Miss Kenton, will I be able to call myself, as you put it, a

well-contented man.' (173)

執事として高みを目指すことを、自分の幸せはダーリントン卿に尽くすことのみであると断言するのである。

卿が亡くなってからは、旅の途中で人からダーリントン・ホールのことを訊かれた際に、また屋敷を訪れたアメリカ人夫妻にも、ダーリントン卿に仕えていたかを訊かれた際にも、彼はダーリントン卿を知らないと言いつく。しかし、彼は回想の中で、卿を擁護し、彼の宥和政策は正しかったとつぶやくのである。彼は人生をかけて尽くした主人が現在の社会で酷い扱いを受けていることに耐えられないという悲しい気持ちなのである。木下卓も「敗訴して悲劇的な最期を迎えたダーリントン卿の場合、その顛末を語る執事の主人への忠誠心とあいまって、哀感が漂うのである」¹¹⁾と言及している。そして、彼はダーリントン卿こそが本当の紳士であると述べるのである。

Let me say that Lord Darlington was a gentleman of great moral stature—a stature to dwarf most of these persons you will find talking this sort of nonsense about him—and I will readily vouch that he remained that to the last. (126)

旅をしながら、彼は、ミス・ケントン、父親、ダーリントン卿と回想する中で、その各々に対して「あきらめた恋への後悔」、「息子としての後悔」、「主人への哀感」と気づいていき、沈着冷静な執事の時にはなかった感情が出てくることになるのである。

そして、この旅行において、ステューブンスは執事としての品格をあらためて考える機会も得られるのである。二日目のドーセット州で、彼は、「尊敬される執事とは？」という問いの解答にたどり着くのである。

For we were, as I say, an idealistic generation for whom the question was not simply one of how well one practised one's skills, but *to what end* one did so; each of us harboured the desire to make our own small contribution to the creation of a better world, and saw that, as professionals, the surest means of doing so would be to serve the great gentlemen of our times in whose hands civilization had been entrusted. (115-16)

この解答は、彼が“A 'great' butler can only be, surely, one who can point to his years

of service and say that he has applied his talents to serving a great gentleman—and through the latter, to serving humanity.”（『私は偉大な紳士に仕え、そのことによって人類に奉仕した』と断言できる執事こそ、真に『偉大な』執事であるに違いありませんまい）（117）という言葉でも繰り返している。これらは、ここまでダーリントン・ホールで執事を全うしてきた彼なりの「執事としての生き方」という理念にまで、彼は突き詰めた結論なのである。ここで言う“the great gentlemen of our times”（「当代の偉大な紳士」）とは、彼が仕えたダーリントン卿に他ならないのである。

しかし、その理念も転機を迎えるのである。スティーブンスは、三日目に車がガス欠になり立ち往生してしまい、近隣のモスクム村の親切な夫婦に宿を提供してもらうことになる。その晩、宿のパブでの近隣の人々との談笑中に、「誰が紳士か」の議論になり、ある男から以下のように言われるのである。

‘We won the right to be free citizens. And it’s one of the privileges of being born English that no matter who you are, no matter if you’re rich or poor, you’re born free and you’re born so that you can express your opinion freely, and vote in your member of parliament or vote him out. That’s what dignity’s really about, if you’ll excuse me, sir.’ (186)

この男の言葉には、スティーブンスが考えたこともなかった“free citizens”（自由な市民）という「品格」（“dignity”）があった。この旅行は、ダーリントン・ホールから出たこともなかった彼に「自由である」という戦後の新しい時代の風も送り込んでくるのである。

とにもかくにも、この旅行で、スティーブンスはこれまでの執事としての人生を回想するのである。しかも旅が進むにつれて、その回想は深まり、彼は過去を現在からじっくり見ることができ、あの時はわからなかったことが分かるのである。まさに人は後に知るものだからである。

III

ここでは、スティーブンスの旅行における人との出会いと出来事に焦点を当てて述べる。物語には、道中の風景が彼の眼を通して描かれている。旅行したことのない旅行者のように道中の景色を称賛するとともに、旅を進めながら、様々な人との出会いによって、スティーブンスの回想は深まっていくのである。

プロローグで、スティーブンスは旅行に行くことになった経緯を語っている。彼

はアメリカ人の主人がしばらく帰国する間、屋敷から離れてイングランドの美しい風景を見に出かけるよう勧められるのである。当初、主人が外国人であるがゆえの気晴らしのような勧めであると解し、主人の命ではあるが、その返答に戸惑っている。しかし、ミス・ケントンからの手紙を受け取り、彼女を訪ねるためという大義ができたことによって、屋敷のあるオックスフォードシャーから彼女のいるコーンウォールまで旅行に出かけることになる。

一日目に、ダーリントン・ホールを出発して間もなく、スティーブンスは小休憩をとるために車を降りた際、たまたま出会った男に促され、気が進まなかったが丘に登る。そこで彼は予想もしなかった美しい田園風景を目の当たりにして感動し、その景色に称賛の声を上げるのである。その風景とは、なだらかに起伏しながらつづく丘のつらなり、遠くにかすむ教会の尖塔、点在する羊たちの牧歌的景色なのである。

What I saw was principally field upon field rolling off into the far distance. The land rose and fell gently, and the fields were bordered by hedges and trees. There were dots in some of the distance fields which I assumed to be sheep. To my right, almost on the horizon, I thought I could see the square tower of a church. (26)

旅の初めからスティーブンスはこうした田園風景のすばらしさを称賛しているが、実は彼にとって道中で目にする景色の知識はジェーン・サイモンズ夫人著『イギリスの驚異』(*The Wonder of England*) を介して間接的に得たものなのである。そうだと断りを入れた上で、しかしなお、スティーブンスは、そうした知識は忘れたように、大げさなまでに称賛する。

It has never, of course, been my privilege to have seen such things at first hand, but I will nevertheless hazard this with some confidence: the English landscape at its finest—such as I saw it this morning—possesses a quality that the landscapes of other nations, however more superficially dramatic, inevitably fail to possess. (28)

このように景色を語る点から、他人の権威を借りての大言壮語であるが、彼には物事を美化し、美しい物語にしようという癖もあるようだ。彼は根っからのロマンチストかもしれない。

そして、二日目の午後は、スティーブンスに思わぬ事態が起きる。彼がドーセッ

ト州に入った直後、車がエンストを起こし立ち往生になってしまうのである。しかし、ここでも偶然に近隣の屋敷の従卒に助けをもらい、その上近くにある静かな美しい池を紹介してもらい、一日目と同様にその景色を満喫するのである。しかもその従卒との出会いや池を散策したおかげで、彼は「偉大な執事」(“a great butler”)について考える機会を得る。彼は偶然の出会いのある旅の効用を認め、以下のように語るのである。

As I say, I have never in all these years thought of the matter in quite this way; but then it is perhaps in the nature of coming away on a trip such as this that one is prompted towards such surprising new perspectives on topics one imagined one had long ago thought through thoroughly. I have also, no doubt, been prompted to think along such lines by the small event that occurred an hour or so ago—which has, I admit, unsettled me somewhat. (117)

この旅行で、ステーブンスはこのように景色を満喫することや出会う人々の素朴な温かさに心ませたり戸惑ったりすることで、これまでの人生を振り返ることが可能になるのである。彼の旅について、新井は「過去の栄華に遡り、自分自身の執事としての誇りを取り戻し、人生をより良き方向に修正することにあつた」¹²⁾と指摘している。

ステーブンスが偶然のように親切な人と美しい風景に出会えることについて、矢次綾は「このようにイシグロは、ステーブンスが他人の誘導によって脇道に逸れなければ美しい風景に出会えない様子を叙述しながら、他人に促されなければ物事の真の姿が見えないという彼の傾向を暗示している」¹³⁾と言及している。イシグロは、人の内面的な成長に旅は格好の機会を与えるもの、と思いついたといえよう。

最終章にある六日目で、ステーブンスはミス・ケントンとの再会を果たす。彼女は美しく年老いており、多少の波風を立たせることはあっても平穏な家庭生活を営みながら初孫の誕生を心待ちにしており、結局夫を愛せるようになったことを彼は聞かされる。そして彼女が執事に帰する可能性がないことを悟るのである。彼が彼女の手紙から想像していた彼女と共に働いていた過去を再現することは挫折してしまうのである。

ミス・ケントンと別れた後の夕方、ステーブンスはウェイマスの観光地に独りたたずみ、海辺をずっと見ている初老の男にたまたま出会う。彼は、その男が元家令であると知り、彼に自己抑制とあまりに禁欲的かつ自己犠牲に明け暮れた、それゆえに独善的であったこれまでの人生の後悔と老いによる現在の自信喪失を涙ながらに語ってしまうのである。その彼の姿に谷田は「棧橋で会ったばかりの男に涙を

見せるのも、彼がやっと自分の心をさらけだし、執事という衣装を脱ぎ捨てたことを示している」¹⁴⁾と彼の内面的な変化を指摘している。

‘Since my new employer Mr Farraday arrived, I’ve tried very hard, very hard indeed, to provide the sort of service I would like him to have. I’ve tried and tried, but whatever I do I find I am far from reaching the standards I once set myself. More and more errors are appearing in my work. Quite trivial in themselves—at least so far. But they’re of the sort I would never have made before, and I know what they signify. Goodness knows, I’ve tried and tried, but it’s no use.’ (242-43)

スティーブンスは、イングランドの典型的な美しい田園風景を見る機会を得た旅行で、自分の過去をじっくりと回想した結果、自らを殺して執事の持つべき「品格」(“dignity”)や執事が目指すべき「偉大な執事」(“a great butler”)にどれほど固執していたか、そのことがいかに愚かであったかを痛感し、上記の悔悟になったのであろう。

そのように失意に苛まれたスティーブンスだったが、彼に救いの時がやって来る。ウェイマスの海辺で偶然居合わせた男は、彼の悲痛な告白を聞きかされた後、彼に自分の想いを伝えるのである。

‘Now, look, mate, I’m not sure I follow everything you’re saying. But if you ask me, your attitude’s all wrong, see? Don’t keep looking back all the time, you’re bound to get depressed. And all right, you can’t do your job as well as you used to. But it’s the same for all of us, see? We’ve all got to put our feet up at some point. Look at me. Been happy as a lark since the day I retired. All right, so neither of us are exactly in our first flush of youth, but you’ve got to keep looking forward.’ (243)

スティーブンスは、このように諭され、これからの生きる上でのエールも送られるのである。すなわち、男は“You’ve got to enjoy yourself. The evening’s the best part of the day. You’ve done your day’s work. Now you can put your feet up and enjoy it.”(「人生楽しまなくちゃ。夕方が一番いい時間なんだ。足を伸ばして、のんびりするのさ」)(244)と話を続け、スティーブンスは男から生きるヒントをもらうのである。

ウェイマスの海辺は夕暮れ時になってライトアップされ、そこにいた人々が歓声を上げ、彼らが初めての出会いでも楽しげに談笑している姿を見て、スティーブンス

スは“*As I watch them now, they are laughing together merrily. It is curious how people can build such warmth among themselves so swiftly.*”（「いま、ここから見ておりますと、じつに楽しげに笑い合っております。人々が、どうしてこれほどすみやかに人間的温かさで結ばれうるのか、私にはじつに不思議なことのよう思われます」）(245)と自らの気づきをしみじみと述べるのである。これまでの彼には無縁だったそうした華やかな賑わいの風景もイングランドにはあることに彼はやっと気づくのである。ここまでの脇道に逸れながらの旅と様々な人との出会いによって、彼は優れた執事であろうと自分に課していた抑圧から終に解放されるのである。

スティーブンスはウェイマスでの時間をこのように有意義に過ごすことができ、旅の終わりへと向かっていく。屋敷に帰ったら、あのジョーク好きのアメリカ人の主人に尽くさなければならぬ、という自分の切ない気持ちに気づくことになる。その切なさは、この旅行を通して、どんなに後悔したとしても、もはや過去は取り戻せない、自らの生き方は変えることができない、と身に染みて分かったことから来るのである。

過去が取り戻せないことに悲痛な思いになるスティーブンスだったが、ウェイマスの同じ場所で、互いが笑いあいながら、他人とも人間的な温かさを築くことのできる人びとを見て、これからの自分の生き方がふと心に浮かぶのである。坂口明憲が述べるように、彼は、「『冗談を言う』ことこそ人間どうしを温かさで結びつける鍵なのかもしれない」¹⁵⁾、と思いつくのである。そして、彼はアメリカ人が好むジョークの名手になることを志しながらダーリントン・ホールに帰るのである。

旅を終えるスティーブンスは、旅に出る前とは違って、時代の変化に対応してゆこうとする覚悟ができているのである。この結末が、安藤聡は「開かれた結末」であることを以下のように指摘している。

この小説の結末もまた、多くの現代小説のそれと同様、「開かれた結末」である。スティーブンスの旅はウェイマスで終わるわけではむしろなく、ダーリントン・ホールに帰るまでが彼の旅であることは言うまでもない。…当然のことながらそこでもまた様々な風景に感銘を受けたり、思いがけない人々関との出逢いがあり、そういった経験を通しての彼の「学習」と「成長」は続くはずである¹⁶⁾。

スティーブンスの旅は、執事としては、執事としてしか生きてこられなかった自らのこれまでの人生を振り返り、激しい悔悟をおぼえながらも、旅の終わりには残された日々を前向きに生きてゆこうとする心境に到達する旅であったのである。池園宏は「彼の旅は、過去の人生と、現在並びに未来の自己の生き方とにいかなる折り合いをつけられるのかを模索する旅なのである」¹⁷⁾と述べている。そして、本作

品を読んだ後に読者はスティーブンスの内面的な成長に少なからず共感を覚えるのではないだろうか。読者も彼の旅に付き合うことで、自分も過去を回想することを通して現在と対峙でき、最終的には未来に目を向けることができるようになる、というヒントを得られるのではないだろうか。

本作品のタイトルは“*The Remains of the Day*”であり、これは「日が暮れる前のひととき、一日で最も素晴らしい時間」を意味する。ウェイマスの海辺で偶然出会った男がスティーブンスに語った言葉の中にも“The evening’s the best part of the day.”（「夕方が一日で一番いい時間なんだ」）(244)と出てくる。この言葉に読者はタイトルと何か関連すると気づくだろう。物語の背景の時代に沿って言えば、夕暮れ時は、象徴的に、大英帝国が時代の変化に抵抗できなく解体する時と解釈することもできる。イギリスの歴史に注目して、Iで、「『日の名残り』は歴史小説としても読むことができるだろう」と述べたが、平井杏子が「小説の背後に秘された史実から、時代の渦に翻弄される微小な人間の苦悩と、それゆえにこそその輝きが、よりくっきりと浮かび上がってくるのである」¹⁸⁾と述べるように、本作品は一般的な歴史小説と一線を画して、執事という職業をもった一人の男の旅を通しての内面的成長の物語と解釈する方が良いのではないだろうか。

スティーブンスにとって、ウェイマスの夕暮れ時は、イギリスの伝統的な執事としての「品格」を、執事でありながらも人間としての「品格」に入れ替えたときだった。それはまさに彼の内面的成長といえよう。夕日の日差しは穏やかで柔らかいものであり、その穏やかさで人生を受容するような夕日だからこそダーリントン卿に仕えた過去を振り返り、新たな主人であるアメリカ人に仕えようとする意欲を彼に与えてくれたように思える。

そして物語を通して、イシグロは、一人の初老の執事の旅に起きた奇跡のように、初老にさしかかったものなら誰にでも訪れる人生の「日の名残り」のとき、自らの人生を再生させる奇跡を得られる可能性があることを、やはり伝えたいのではないだろうか。それが彼の『日の名残り』の創作の意図ではないだろうか。

注

- 1) 『日の名残り』の人気について、橋本陽介は、その著『ノーベル文学賞を読む ガルシア＝マルケスからカズオ・イシグロまで』において「カズオ・イシグロの小説はなんとといっても、プロットの組み方が抜群にうまい。ミステリーやホラーを思わせる展開も取り入れているため、エンターテインメント的でもあるから、ベストセラーになるのは自然である」と指摘している。(橋本陽介、『ノーベル文学賞を読む ガルシア＝マルケスからカズオ・イシグロまで』、角川選書、2018、p. 240)

- 2) スティーブンスが旅行に出かけた年（1956）について、矢次綾は「イギリスがスエズ運河を失い、時のイギリス首相アンソニー・イーデンがその責任を取って最終的に辞職に追い込まれたスエズ動乱、すなわち、イギリスが大英帝国の名残りの一つを失った事件が勃発した1956年」と言及している。（矢次綾、「カズオ・イシグロと歴史—『浮世の画家』と『日の名残り』」、『言語文化研究』, Vol. 32 (1-2), 松山大学総合研究所, 2012, p. 245)
- 3) 原英一, 「カズオ・イシグロの文学—マジック・リアリズムと沈黙の語り」, 『東京女子大学比較文化研究所紀要』, 78, 東京女子大学比較文化研究所, 2017, p. 51。
- 4) 谷田恵司, 「老執事の旅—カズオ・イシグロの『日の名残り』」, 『東京家政大学研究紀要』, Vol. 32, 東京家政大学, 1992, p. 37。
- 5) Barry Lewis, *Kazuo Ishiguro, Contemporary World Writers*. (Manchester: Manchester Univ., 2000), p. 74。
- 6) 平井法, 「カズオ・イシグロ『日の名残り』論—greatness とは何か」, 『学苑・文化創造学科紀要』, No. 792, 昭和女子大学, 2006, p. 12。
- 7) 引用したテキストは次の版であり, () の数字は, そのテキストのページ番号を表す。Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day*. (London: Faber and Faber., 1989)
- 8) 新井英夫, 「カズオ・イシグロ『日の名残り』における自己物語—なぜスティーブンスは旅に出たのか」, 『松山大学論集』, Vol. 29 (1), 松山大学総合研究所, 2017, p. 290。
- 9) 肖軼群, 「息子としての執事—『日の名残り』における父子関係についての考察」, 『文芸表象論集』, 8, 京都大学, p. 3。
- 10) 本小論の『日の名残り』の日本語訳は, カズオ・イシグロ (土屋政雄訳) 『日の名残り』 (早川書房, 2001) から引用した。
- 11) 木下卓, 「カズオ・イシグロにおける戦争責任—『信頼できない語り手』が語る戦争」小池昌代他『カズオ・イシグロの世界』, 水声社, 2017, p. 157。
- 12) 新井, 前掲書, p. 291。
- 13) 矢次, 前掲書, p. 245。
- 14) 谷田, 前掲書, p. 43。
- 15) 坂口明徳, 「冗談は言わないで: カズオ・イシグロ『日の名残り』考」, *Otsuma review*, Vol. 28, 大妻女子大学英文学会, 1995, pp. 25-26。
- 16) 安藤聡, 「カズオ・イシグロ『日の名残り』—神話的イングランドの崩壊」, 『愛知大学文学論叢』, 135, 愛知大学文学会, 2007, p. 182。
- 17) 池園宏, 「カズオ・イシグロ『日の名残り』における時間と記憶」, 福岡現代

小説談話会編『ブッカー・リーダー—現代英国・英連邦小説を読む』, 開文社出版, 2005, p.213。

- 18) 平井杏子, 『カズオ・イシグロ境界のない世界』, 水声社, 2011, p.90。